第１回 横須賀市立高等学校教育改革検討委員会

■日　時　　平成 25 年（2013 年）７月８日（月）　15:00～17:00
■場　所　　横須賀総合高等学校　ホール会議室
■出席者　　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員（15 人）

委員長	安彦　忠彦	神奈川大学特別招聘教授、名古屋大学名誉教授
委員長職務代理	松本　敬之介	市立横須賀総合高等学校　学校評議委員
委員	赤羽根　丈行	市ＰＴＡ協議会　会長
	小野寺　昌枝	市立横須賀総合高等学校　総括教諭
	菊池　匡文	横須賀商工会議所　事務局長
	小林　雅巳	市立横須賀総合高等学校　ＰＴＡ会長
	坂庭　修	市立横須賀総合高等学校　定時制教頭
	下川　紀子	市立鶴久保小学校　校長
	田中　靖和	市体育協会　理事長
	長井　興一郎	市民公募委員
	中山　俊史	市立横須賀総合高等学校　校長
	福田　敏人	県教育委員会教育局指導部高校教育企画課　課長
	北條　文明	市民公募委員
	山岸　義之	市立横須賀総合高等学校　副校長
	吉田　和市	市立公郷中学校　校長

事務局（６人）

教育政策担当課長　菱沼　孝
教育政策担当主査　栗野　真一
教育政策担当指導主事　河野　和代
教育政策担当指導主事　中川　幸太
教育政策担当指導主事　原口　尚延
教育政策担当　志村　洸哉（記録者）

傍聴者（０人）

■次　第
- 委嘱状交付・教育長あいさつ
- 委員紹介
- 委員長・委員長の職務代理者の選任について
- 横須賀市立高等学校教育改革検討委員会への諮問
- 議事

【議　事】　１　横須賀市立高等学校教育改革について
２　これまでの横須賀総合高等学校の成果･課題について
３　横須賀総合高等学校の教育の充実を図る取り組みについて
４　その他

■資　料

資料１　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員名簿
資料２　横須賀市立高等学校教育改革について
資料３　横須賀市立高等学校教育改革検討の検討スケジュール概要
資料４　市立高等学校の在り方の基本方針 報告書(平成 24 年 12 月横須賀市教育委員会)
資料５　横須賀総合高等学校 開校 10 年の検証
資料６　横須賀総合高等学校の学校運営や教育活動等におけるデータ（全日制）
資料７　横須賀総合高等学校の学校運営や教育活動等におけるデータ（定時制）
資料８　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会条例
資料９　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会の傍聴に関する要領
参考資料１　横須賀総合高等学校説明資料
参考資料２　平成 25 年度学校要覧
参考資料３　学校案内２０１３
参考資料４　創立 10 周年記念「光あふれる学び舎」
プリント　学力向上プラン 報告

■会議概要

栗野主査（事務局）
それでは、今回が第１回目ということで、横須賀市教育委員会永妻教育長から、委員の皆様に委嘱状を交付させていただくとともに、一言ごあいさつを申し上げます。委員の皆様お一人ずつにお渡ししていきますので、交付の際お名前をお呼びいたします。その際お立ちくださいますよう、お願いいたします。

永妻教育長より、委員一人ずつに委嘱状を渡す。

永妻教育長
それでは、本日第１回目の検討委員会でございますので、高い席からではございますが、一言ごあいさつをさせていただきます。ただいま委員の皆さまには委嘱状をお渡しさせていただきましたが、大変何かとお忙しい中、検討委員会委員をお引き受けいただきまして本当にありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。横須賀総合高等学校でございますけれども、すでに、事務局からご説明させていただいておりますとおり、平成 15 年に、それまで３校ございました市立の高等学校、横須賀高等学校、横須賀商業高等学

校、横須賀工業高等学校この３校が統合されまして、総合学科の横須賀総合高等学校として開校されたわけでございます。総合学科の特色を生かした教育活動をこれまで進めて参りまして、昨年 10 年目を迎えたということで、これまでの課題などを教育委員会として整理をし、横須賀市立の高等学校の在り方の基本方針としてまとめたところでございます。横須賀総合高等学校が市内の唯一の高等学校であるその存在意義を高め、そしてさらに教育内容の充実を図っていくためにも、ここで新たに横須賀総合高等学校が目指す学校像など、皆様にご検討いただき、大所高所からそれぞれのお立場で忌憚のないご意見をいただき、横須賀総合高等学校を更に高めていきたい、このように思っております。横須賀総合高校の改革に皆様方のお力をお貸しいただけますよう、よろしくお願い申し上げまして、あいさつに代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

栗野主査（事務局）
続きまして、本日が第１回目の委員会となりますので、委員の皆様を事務局から改めて紹介させていただきます。ご着席のままで結構です。お名前をお呼びいたしますので、ご一礼をお願いいたします。

栗野主査より、委員一人ずつの紹介。

栗野主査（事務局）
委員の皆さまありがとうございました。なお、事務局につきましては、教育委員会菱沼教育政策担当課長をはじめ、教育政策担当のものが務めさせていただきます。

事務局一同礼

栗野主査（事務局）
それでは、議事に入ります前に、会議資料について、確認させていただきます。
お手元をご覧ください。まずは、本日の次第、
　資料１　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員名簿
　資料２　横須賀市立高等学校教育改革について
　資料３　横須賀市立高等学校教育改革の検討スケジュール概要
　資料４　市立高等学校の在り方の基本方針 報告書(平成 24 年 12 月横須賀市教育委員会)
　資料５　横須賀総合高等学校 開校 10 年の検証
　資料６　横須賀総合高等学校の学校運営や教育活動等におけるデータ（全日制）
　資料７　横須賀総合高等学校の学校運営や教育活動等におけるデータ（定時制）
　資料８　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会条例
　資料９　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会の傍聴に関する要領
　参考資料１　横須賀総合高等学校説明資料
　参考資料２　平成 25 年度学校要覧

参考資料３　学校案内２０１３
参考資料４　創立 10 周年記念「光あふれる学び舎」
それから、「学力向上プラン　報告」のプリントを１枚追加で置かせていただきました。
以上です。資料に何か不足等ありますでしょうか。

それでは、お手数ですが、資料８　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会条例こちらをご覧ください。この条例は、本委員会の設置や運営などについて規定をしているものです。この条例に基づき、本委員会を運営して参ります。

条例では、資料の中程になりますが、「第３条第１項」で「委員会に委員長を置き、委員が互選する。」と規定しています。
また、第２項で「委員長は、会務を総理し、会議の議長となる」と規定していますので、委員長選任後は、委員長に会議の進行をお願いすることになります。
そのため、まず委員の皆様の中から、委員長をお選びいただきたいと思いますが、どなたかご意見はありますでしょうか。

中山委員
はい。

栗野主査（事務局）
中山委員お願いします。

中山委員
会議の進行などを考慮しますと、学識経験者というお立場でご参加されている、安彦委員に、委員長をお願いするのが良いのでは、と思いますが、いかがでしょうか。

各委員
異議なし

栗野主査（事務局）
皆さまご異議なしということですので、それでは、安彦委員に、委員長をお願いしたいという声が多くありましたが、安彦委員いかがでしょうか。

安彦委員
了承の意

栗野主査（事務局）
ありがとうございます。

各委員
拍手

栗野主査（事務局）
恐れ入りますが、安彦委員長は、委員長席へ、移動をお願いいたします。

安彦委員長　委員長席に移動

栗野主査（事務局）
ここで、安彦委員長、一言ごあいさつをお願いいたします。

安彦委員長
改めまして、委員長を務めさせていただきます安彦でございます。こういう非常に大事な、学校ひとつの将来を考えるといいましても責任の重い委員会の委員長として大変緊張しております。今お話がありましたが、国の中教審の高校教育部会の方でも多少情報が入る立場でございますので、そういうことも兼ね合わせて、皆様にも必要な情報を提供して、検討を深めさせていただきます。２年間という仕事で、来年も続きますが、最終的に報告書がまとまる方向で皆様のご協力をお願いしたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いします。

栗野主査（事務局）
安彦委員長ありがとうございました。続いて、「条例第３条３項」に「あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する」とありますので、委員長の職務代理者を安彦委員長からご指名をいただければと思いますが、委員長いかがでしょうか。

安彦委員長
それでは、職務代理者として、松本委員にお願いをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

各委員
賛成の意

栗野主査（事務局）
松本委員にご了解いただけたということで、恐れ入りますが、松本委員は、委員長職務代理者席へ、移動をお願いいたします。

松本委員　委員長職務代理者席へ移動

栗野主査（事務局）
恐れいりますが、松本委員長職務代理者からも一言ごあいさつを頂けますでしょうか。

松本委員
思ってもいない役が回ってきまして、委員長の代理ということで、委員長になにもないことを祈っております。どうぞよろしくお願いいたします。

栗野主査（事務局）
ありがとうございました。それではただいまから、本委員会でお検討いただく内容についての諮問書を、教育長より委員長にお渡しいたします。

永妻教育長
平成 25 年７月８日　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員長様　横須賀市教育委員会委員長　三浦溥太郎　横須賀市立高等学校の在り方について諮問　横須賀総合高等学校は、平成 15 年４月に市立高等学校３校を統合し、総合学科の高等学校として、開校いたしました。開校以来、一人一人の良さを伸ばし、自ら学び、主体的に考え判断し、行動できる、心豊かでたくましく生きる力に満ち溢れた人間の育成を教育目標に掲げ、総合学科の特徴を生かし、キャリア教育、情報教育等に力を注いでまいりました。開校より 10 周年をむかえ、これまでの教育を振り返るとともに、更なる教育の充実を図るため、横須賀市立高等学校の在り方について、幅広い観点からご検討いただき、目指す学校像と教育改革の重点について、答申してくださいますよう、ここに諮問いたします。どうぞ委員長よろしくお願い申し上げます。

栗野主査（事務局）
永妻教育長につきましては、他の公務の関係で、申し訳ありませんが、ここで退席させていただきます。

永妻教育長
委員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。失礼させていただきます。

栗野主査（事務局）
それでは、本日の議事を進める準備が整いましたので、改めて第１回横須賀市立高等学校教育改革検討委員会を開催させていただきます。
資料８「横須賀市立高等学校教育改革検討委員会条例」第４条第２項の規定により、本委員会の開催にあたっては、半数以上の委員の出席が必要となりますが、本日は、委員 15 名全員が出席をされていますので、本委員会は成立しております。
それでは、これより進行を委員長にお願いいたしまして、議事を進めていただきます。

委員長よろしくお願いいたします。

安彦委員長

　それでは議事に入ります。議事１　「横須賀市立高等学校教育改革について」事務局から説明をお願いします。

河野（事務局）

よろしくお願いします。
それでは資料２をご覧ください。
最初に横須賀市立高等学校教育改革の経緯について説明いたします。

資料にもありますように、平成 24 年度に開校 10 年を迎えたことを受け、これまでの横須賀市立横須賀総合高等学校のあゆみについて振りかえり、その成果や課題を把握するとともに、横須賀唯一の高等学校として、今後どのような学校としていくのかについて、教育委員会内に昨年度プロジェクトチームを設置し、検討を行いました。そして、資料４の市立高等学校の在り方の基本方針を策定いたしました。

　資料４「市立高等学校の在り方の基本方針」をご覧ください。
「はじめに」で総合学科の設置と基本方針策定の経緯が書かれております。２ページから３ページについては、基本方針の最後にありますデータや横須賀総合高校の校長先生からの説明をもとに、高校の現状、成果、課題をまとめてあります。これらをもとに、プロジェクトチームでは、横須賀市立の高校像として目指す学校像を策定いたしました。また、４ページから「教育改革の重点」として、４点をあげ、短期的取り組みとして「総合学科の一層の充実」「系列と科目の再編成等」「スポーツ活動や文化活動の充実」をあげております。また、中・長期的な取り組みとして、横須賀総合高校の教育の一層の充実を図る観点から「中高一貫教育」についても検討課題としてあげております。これについては、解決すべき多くの課題があることから本検討委員会を設置し、短期的取り組みの経過を踏まえつつ、その実現性や必要性も含めて検討する必要があるとしています。

　資料２におもどりください。
　従いまして、この基本方針については、あくまでも教育委員会内部の組織で検討したものであり、本年度この基本方針の「現状と課題」をもとに、多くの方にご参加いただく本検討委員会で、改めて、横須賀市立高等学校の在り方として、「目指す学校像」「教育改革の重点」についてご協議いただき、方向性をいただくこととしております。
　本検討委員会には、資料１にありますように、さまざまな立場の方にご出席いただいております。学校から捉えた成果と課題にとどまらず、学校に関わっていただいている方々、あるいは、小学校や中学校から、また県全体の中の一つの高等学校として、あるいは、市民の方にとって、横須賀総合高校がどのような高校とこの 10 年間捉えられているのかとい

うことをお話いただき、これまでの横須賀総合高校の成果と課題をまとめていただきたく思います。
そして、横須賀市がもつ唯一の高等学校として、目指す学校像について、ご協議いただければと思います。10 年前の開校より多くの方々の思いでここまできた横須賀総合高校が、今後どのような高等学校として存在していくのかを、多くの方のご意見をいただきながら、その方向を定めていただければと思います。また、その目指す学校像に近付けるための教育改革案をお考えいただくとともに、これからの市立高等学校の方向性を提言としてまとめていただくことが本委員会の目的となります。資料４の基本方針につきましては、お読みいただいているかと思いますが、あくまでも１資料ということでございますので、これを参考にしていただきながら、検討をよろしくお願いします。

３番の検討スケジュールにつきましては、資料３をご覧ください。
本検討委員会は全７回の開催を予定しております。本日の第１回目は、これまでの横須賀総合高校の成果と課題をご協議いただき、そして、現在の横須賀総合高校の取り組み等についても共通理解をいただく回といたします。次回２回目には、目指す学校像について、本年度は３回までとさせていただきますので、３回の中で、目指す学校像をまとめていただくことを考えております。次年度はその目指す学校像となるための教育改革案についてご検討いただく予定でおります。来年９月を最終回といたしまして、検討委員会より答申を頂く予定としております。以上でございます。

安彦委員長
はい、ありがとうございました。それでは、ただいま事務局から説明がありました内容について、ご質問やご意見がありましたら、挙手でお願いいたします。どなたからでも結構です。資料２は検討の内容になりますが、それから、資料３はスケジュールですけれども、この辺もなにかご質問、ご意見がありましたらお願いします。

吉田委員
中学校校長会から参りました吉田と申します。スケジュールについてお伺いしたいのですけれども、プロジェクトに少し参加した者からということで、資料４の５ページまでのところにあると思うのですが、この短期的なものと、それから中長期、特に、中高一貫については、新たにこの検討委員会とは別に中高一貫のための実行委員会、または検討委員会を作られるようにと思ったのですが、この検討委員会の中で、これも一緒に入るという確認でよろしいですか。

河野（事務局）
こちらの委員会の中で、中高一貫教育も含め、横須賀総合高校の教育改革についての、具体的な案をご検討いただくということで、この中で中高一貫教育についてもご検討いただきたいと考えております。

吉田委員
そうしましたら、27 年度がこの具体的な短期の取り組みのスタートなのか、中長期、特に中高一貫教育については、27 年度スタートなのかそれとも、それは遅れていくのか、そこら辺のスケジュールはいかがですか。

河野（事務局）
短期的な取り組みについては、この後学校の方からも、現在取り組んでいるということで、議事の３に現在の取り組みということで少しお話をいただくことになっておりますが、短期的取り組みにつきましては、ここの検討委員会での検討と平行しながら、本年度から高校の教育課程についても新しいものに変わってございますので、そのあたりは委員会と高校で連携しながら、短期的に取り組めるものは取り組んでいきたい、それから、中長期的な中高一貫教育等の大きなものにつきまして、こちらで答申をいただき、それを受けてまた、委員会として次の準備に入るというように考えております。

吉田委員
わかりました。中学校と同時に、小学校の代表として下川委員がこの会に参加されていて、万が一、中高一貫校となった場合は受験について、中学校というよりは、小学校さんの方に色々な状況が出てくると思うので、そういうところは是非慎重にご検討いただけたらよいと思います。以上です。

安彦委員長
ほかにはいかがですか。

北條委員
資料５についてもよろしいでしょうか。資料４と５で、資料５はどういう位置づけのものでしょうか。

河野（事務局）
資料４よりも資料５が新しいものでございます。資料４は、昨年度プロジェクトチームが、検討した結果の資料でございます。その資料４にあるデータは昨年度のものでして、今年度新たにみなさんにご検討いただくということで、新たに資料６，７を準備いたしました。資料５は学校として総括したものを文章で表していただいた資料です。

北條委員
資料５は総合高校でまとめた資料ということですか。

河野（事務局）
そうです。このあとご説明いただきながら、ご検討いただくということでございます。

安彦委員長

　他にはどうでしょうか。ではまた何か気づきましたらぜひ言っていただくということにいたしまして、横須賀市立高等学校教育改革に向けた検討については、事務局の説明のように進めたいと思います。なお、「基本方針」については、事務局が説明した通り、教育委員会内のプロジェクトチーム、ＰＴといっているようですけれども、プロジェクトチームが作成したものであり、これはあくまでも、先ほども説明がありましたが、とらわれないでというお話でした。そうは言いましても一応資料として出されていますから、賛成でも反対でも参考にしていただくのは結構ですので、様々な視点から忌憚のないご意見を頂きたいと思います。

安彦委員長

次の議事の２、議事の３については併せて、事務局から、説明をしていただきます。

河野（事務局）

それでは資料５をご覧ください。

　この資料は、このあと本検討委員会で、横須賀総合高校の現状及び成果・課題を検討いただくために、横須賀総合高校より開校 10 年の検証としてまとめていただいたものです。資料については、後ほど、横須賀総合高校の方よりご説明いただきます。

　資料６ですが、昨年度のプロジェクトチームがまとめた基本方針の折に検証に利用したデータとして、「基本方針」の後ろに昨年度の古いものがのっております。本年度は同じものですが、資料６、資料７ということで新たなものとして、用意いたしました。

　資料６が全日制、資料７が定時制です。

これらの資料をもとに、10 年間の高校のあゆみについて、振り返っていただき、成果・課題をまとめていただければと思います。

　また、議事３については、基本方針の短期的取組にありますように、現在横須賀総合高校として、取り組んでいることについて、横須賀総合高校の方からお話をいただき、そのことについての共通理解を図っていただくことをお願いいたします。なお今回、後から１枚「学力向上プラン　報告」ということで、参考資料を付けさせていただきました。横須賀総合高校の方から参考資料１を元に、横須賀総合高校について簡単にご説明をいただき、併せて現在の取り組みについて、委員のみなさんにご理解をいただければと思いますので、よろしくお願いします。以上でございます。

安彦委員長

それではまず、議事の２の方の審議をさせていただきます。「これまでの横須賀総合高等学校の成果・課題」につきまして、総合高校の中山委員からお話いただけますでしょうか。

中山委員

総合高校校長の中山と申します。よろしくお願いします。私もこの４月に着任したばかりで 10 年の総括については高校の中で話題になっていることについて、ご説明をさせていただくということになります。資料５に入る前に、先ほど事務局からお話がありました、別冊で、横須賀総合高校・・・〔夢・目標の実現に向けて〕という学校案内の説明資料が別途、冊子になっているかと思います。これを使って先に学校のことをご説明させていただいた上で、この 10 年間の総括にふれさせていただこうかというふうに思います。今各中学校から学校見学に来られている学校が多いですが、その時に使っている資料ですので学校案内という資料になります。今日は、全日制、定時制、両方の話になりますけれども、この資料については全日制のものとご理解いただければと思います。それでは、横須賀総合高校の沿革につきましては、先ほどからずっと話がありますけれども、平成 15 年に市内の３校を統合して、単位制の総合学科の高校として誕生し、この５月に 10 周年記念式典を行いました。学科、学年制、単位制につきましては、みなさんご承知かと思いますけれども、本校は、総合学科の単位制ということですが、学年制をしいている普通科としては、この近隣では、横須賀高校、横須賀大津高校、追浜高校、それから、専門学科の学年制をしいているところでは、県立横須賀工業、横浜市立横浜商業、という形のものがあります。それに対して、近隣で単位制をしいているところは、普通科としては、三浦臨海高校、あるいは神奈川総合高校、専門学科の単位制としては、横須賀明光高校、ここは福祉、国際といった形になろうかと思いますが、それから、海洋科学高校ということの中で、本校は、三浦半島で１校の総合学科高校ということの位置づけになっております。その下の総合学科の特徴としては、そこに書いてありますけれども、単位制であるということと、本校では様々な選択科目を開設しておりますが、100 科目以上という選択科目を設定しております。そして、選択科目につきましては、生徒の特性によって、分類しておりますが、系列として本校は８系列と、この辺は後ほどもう少し説明させていただきます。それから、１年次で「産業社会と人間」を履修しております。単位制のことですけれども、これは卒業までに必要な単位を修得するということ、74 単位以上が本校の規約となっております。したがって、原則留年がありません。２、３年次の共通履修科目もございます。横須賀総合高校の系列でございますけれども、先ほど８系列というお話をしましたが、①の国際人文系列にはじまりまして、自然科学、生活福祉、体育健康等、ご覧の８の系列がございます。本校の選択科目の特色としましては、今のところ進学のパーセンテージが、生徒のニーズとして多いもので、進学に向けた科目を多く設定しております。進学の中でも、音楽大学であったり、美術大学であったり、福祉系の大学に進学している生徒も数多くいます。例えば、福祉という系列の授業の中では、ベッドメイキング、衣服の着脱、移動の援助等々、そういった授業が行われております。次のページにいきまして、ビジネスに関する資格の取得、これは商業関係になりますけれども、そこに掲げられているような資格を取得することができます。工業関係の資格取得ということでこういったものが取得できます。キャドにつきましては、県立工業高校にはございますけれども、それ以外で持っているのは、本校だけという形になっております。「産業社会と人間」とは、ということですが、先ほど

総合学科の特徴として、１年次で「産業社会と人間」を必ず履修するとお話しましたが、これは、将来的な進路を主体的に考え、自分を見つめて、進路選択に必要な能力、態度を身につけるということで、自分の夢、その夢の達成に向けて、科目を選択し、自分の時間割を作成していくことになります。26 年度、来年度入学生の履修について、書いてありますが、１年次については、基本的にあまり選択する科目がございません。音楽、美術、書道とありますが、その部分だけの選択となります。２年次になりますと、総合選択科目とあるところについては、基本的に生徒が、自分の進路に合わせて、選択をしていくということです。３年次になると、更に選択科目が多くなり、ほとんど、時間割を自分で作っていくという形になっております。横須賀総合高校の特色としましては、そういった部分でのキャリア教育の推進ということで、自分の将来を見据えて、一人一人が違うということで、きめ細かい指導をしております。さらに、情報教育と国際教育に力を入れておりまして、情報教育ということでは、ノートパソコンを一人１台入学時にリースということで、使わせております。国際教育については、オーストラリアのエラノラ高校と姉妹校関係をもって交流しており、短期留学を実施、あるいは、修学旅行の２年次に行きます行き先がシンガポールということで、現地の大学生などとコミュニケーションをはかりながら実施をしているところがございます。特色の２としては、先ほどからお話しているとおり、８系列 100 科目を超える総合選択科目を設置しております。生徒は、比較的落ち着いた学校生活を送っており、進学希望者への対応も充実させていっております。横須賀総合高校の進路状況につきましては、５割以上の生徒が、４年制大学というところで、短期大学、専門学校を含めると、８割の生徒が進学をしているというところでございます。「本校の求める生徒」は保護者対象の説明資料ということで、説明に使っております。部活動の成績につきましてですけれども、陸上競技部とアーチェリー部が運動部の中では、夏のインターハイに出場を決めております。その他、美術部、ワープロ＆検定部も全国大会への出場を決めていますし、先日、コンピュータ部につきましても、東日本大会への出場を決めています。その他、室内楽部は県で合同のバンドを組んでということになりますが、そのメンバーとして、室内楽部の生徒が出場しているというところでございます。以下の施設については、ご覧いただければと思います。このような、横須賀総合高校の現状を見ていただいた中で、資料５にお戻りいただいて、本校の 10 年の検証を少し説明させていただきたいと思います。まず、体裁ですけれども、資料５の前半２ページが、全日制の総括になっております。後ろの２ページが定時制の方になっております。まず、全日制の方ですけれども、教育目標については、学校教育目標、本校の目標とする人間像について、そこに書いてあるとおり設定しております。その学校教育目標ですけれども、基本的には総合学科の理念を目標に掲げていることの中で、本校としては、総合学科が目指しているもの、現在のところは学校教育目標の見直しは必要ないのではないかというとらえをしております。３点目の教育指導方針については、今お話したとおり、国際、情報を核として推進しておりますけれども、こういった部分は 10 年前に設定した部分ですので、もう一度現状にあっているかということを見直す必要があるのではという風に考えております。２ページになります。総合学科としての総括という中では、枠の下のところに（４）「産業社会と人間」

の取り組みと科目の目標の達成状況について、とありますけれども、これにつきましては、「産業社会と人間」は10年間中身を毎年毎年変えながら、改善を加えながら、より良いものにしてきたと、というようなことで、おそらく、その内容、その取り組みについては、県内でもトップクラスではないかと自負をしております。しかし、目標の達成状況について、今の時点で判断するのはなかなか難しいというふうに考えております。別冊の「光あふれる学び舎」のところに若干アンケートの結果が載っていますけれども、そういったところをみていただくと、本校の卒業生の様子が、少しうかがえるのではないかと思います。それから、（５）各系列の設定と履修についてですけれども、この８系列という系列も、県内最多ということで、普通科目と、専門科目のバランスは取れているのではないかと思っています。これは、工業科、商業科が前身だったという利点を生かしているからと思いますが、ただ、生徒の履修状況については工業系列の科目の履修者が少ない、という実態があります。（６）の単位制についてですが、これについても総合学科が単位制を採用しているのは、個性化、多様化、弾力化の実現にあるということです。そういった中、本校では先ほど示しました８系列で実施しておりますけれども、この系列はあくまでも目安ということで、その系列の中からしか、科目を選択できないという訳ではございません。全ての科目の中から選択ができるということになっております。選択の仕方についても、「産業社会と人間」の中で指導している部分があって、安易な選択に流れているという訳ではないのではないかと、考えております。３ページに進みまして、学習指導については、生徒の学習状況は、概ね、授業時間中の態度は良好と考えております。しかしながら、業者テストなどの結果をみると、入学時の力が必ずしも伸びているというのが言い切れないであるとか、あるいは家庭学習の時間が非常に短いというようなことが課題としてあがっております。そこで、本校では、学力向上プランに取り組んでいる状況であるということです。これはまた後ほど説明させていただきます。（８）の教師の学習指導につきましても、開校以来、学習指導グループを中心に年４、５回の校内研修を行っているということで、教師の指導力アップについても、大きな課題として取り組んでいるということでございます。４番の生活指導・生徒指導につきましては、非常に落ち着いた雰囲気で学習しているということで、特段大きな問題はないかと考えております。５番の進路指導につきまして、進学、就職状況についてですが、就職については、就職難の時代ですけれども、毎年ほぼ100％の実績を上げていて、なおかつ、公務員などについても、高い合格率を上げています。それから、各系列の履修状況と進学、就職状況との関係についてですが、これについては、有意な相関関係は認められないというところでございます。６番の部活動につきまして、これについては、勝利至上主義ではなく、学業と両立してということが大きな目標だと考えております。しかしながら、今年度もインターハイに出場する部活があるなど充実した活動をしているのではと、考えております。４ページにいきまして、異校種や家庭・地域との連携についてですが、中学校や小学校との連携もございますし、(14) 家庭、地域との連携についても、ＰＴＡと地域のイベント、今度の土曜日もペリー祭がありますが、そういったところにも参加をして、市立が１校しかないというのもございますので、市からのニーズも多くありまして、それに出来るだけ答えるということで、協力をしているところ

です。８番その他としては、課題として３校統合したということで、教職員が 30 人加配の状況でスタートしていましたけれども、段々年月を経ることで、定数に落ち着いてきているということの中で、教職員の平均年齢が高くなってきているということがございます。すみません。ここに誤字がございまして、課題のところの下から２行目になりますが、真ん中あたりの「開校講座を維持できない」「開校」が学校を開く漢字になっていますが、講座の開講で「校」の字が講義の「講」という漢字でご訂正いただきたいと思いますが、開校当時の講座数を維持できていないということに加えて、時間割の作成が非常に困難になってきている状況であります。定時制の部分ですが、１番教育目標の学校教育目標と本校の目標とする人間像は全日制と同じでございます。３番の指導目標については、定時制の生徒の実態に合わせてそういった指導目標ということで、掲げております。（３）定時制の指導目標についてですが、定時制の生徒の実態としては、学力の差の幅が非常に大きいということであるとか、あるいは、人との関わりの中で、中学校時代難しい面があったというお子さんや、様々いますのでそういった中でどういった力をそれぞれの子どもに要求しながら、築き上げていくかということが課題であって、そういったところからこの指導目標が掲げられていますが、今も定時制の生徒の実態については、大きな変動がないことから、今後も指導目標は継続していくことが必要ではないかと考えております。６ページにいきまして、総合学科の教育課程の部分では、やはり「産業社会と人間」の達成状況については、今お話したとおり、なかなか人間関係がつかめない中のお子さんについては、狭い自分の範囲でしか社会に出ることができない。あるいは、様々な耐性が十分育っていないで目先のことしか考えられないといったことが実態としてあがっていますので、こういった部分を考えると、学習指導方法も考えていく必要があるかと思います。（５）の系列につきまして、定時制については、３系列となっております。総合選択科目はバランスよく設定されていると思っていますが、教職員との人数の兼ね合いで、これ以上の科目設定を多くすることは、なかなか難しいということがあります。それから（６）の単位制について、単位制ではありますが、定時制については年次ということをかなり意識して取り組んでおります。これは先ほどお話した通り、人間関係について意識し、育てていくということから、意図的に学年というものを意識させております。それから学習指導につきまして、生徒の学習状況については、入学してからの学力差が大きいということで、少人数授業とか、習熟度別授業を進めているところがございます。７ページにいきまして、教師の学習指導については、中学時代不登校であったお子さんもたくさんいらっしゃるので、もう一度やり直そうという気持ちを大切にしています。そういった以外にも、中退して学びなおしている生徒、あるいは、外国籍で、日本語の読み書きが不十分な生徒等、それぞれの個別にあった指導をしています。生活指導・生徒指導につきましては、そういった部分で指導が必要な生徒は、中にはいるというのが実態ですけれども、基本的な生活習慣が身についていないから、そこをしっかりやり、あるいは、担任とのコミュニケーションを十分にやっていくといったことにポイントをおいて指導しております。進路状況です。進学、就職状況については、３分の１以上の生徒が進学をしています。就職については、定時制については、厳しい状況が続いており、希望する職種に就くのは、中々難しい実態がござい

ます。（11）に書いてある各系列の履修状況と進学・就職状況との関係について、定時制については、福祉関係の科目を選択した生徒が、その後、福祉関係の専門学校に進学し、あるいは、フードデザインを選んだ生徒が、製菓学校や調理師学校に進学しているという実態がある中で、一定の成果をあげていると考えております。部活指導について、定時制の場合、活動時間が９時から 10 時という１時間ですので、なかなか短い時間でしか活動できませんが、今年度は、ソフトテニス部、陸上部、柔道部が全国大会に出場するということで頑張っていることがうかがえます。８ページになりますけれども、異校種や家庭・地域との連携について、学校を実施している時間が夜になりますので、なかなか小、中学校との連携は難しい状況がありますが、地域については、地域貢献デーを設けて、学校周辺のごみ拾いを実施しているところがあります。以上雑駁ですけれども、今の 10 年間の状況等説明させていただきました。なお、資料６、資料７については後ほどご覧いただければと思いますので、よろしくお願いします。

安彦委員長

ありがとうございました。それでは、今ご報告いただいた資料、更には、資料６、７の新しいデータが入っていますが、それをご覧になって、事務局等に質問がございましたらお願いします。

菊池委員

参考までに聞きたいのですが、工業系列の科目の履修者が少ないというお話がございまして、把握している範囲で結構ですが、どれぐらいの割合かということと、かなり専門性の高い講習を受けていると思うので、履修した生徒がどれだけ資格の取得につながっているのか、細かくわかるといいのですが、分かる範囲で参考までに教えていただきたい。

山岸委員

年によって、ばらつきがあるので、昨年度の、今行っている授業の例でお話させていただきますが、工業科目につきましては、17 科目が置かれています。その中で、本校では、２名以下の講座については、閉講ということをしていますが、17 科目のうち、14～15 科目は１桁及び、０となっています。０はそんなに多くはないですが、１桁という状況です。１桁の科目については今年、移行期ということもありまして、捉え方が難しいところもあり、全体をみても１桁の科目は他にもありますが、半分から５分の３くらいは、工業科目は１桁の開講になっている。そういうことを考えると、そこに集まる生徒は、多くはないです。ただ非常に人気があって、当初１講座の予定が、溢れたので、２つ、３つと、広げている講座もあります。概していうと多くはない、そういう状況です。資格取得率については、全てのデータを手元に持っているわけではないので、この間話をしたところ、例えば、工業のガス溶接などではかなり高い確率で受ければ大丈夫というところです。そのような話がありました。危険物取扱者試験では、聞いたところ、旧工業高校時代では、１、２割の合格者だといっておりましたが、本校では５割くらいの生徒が受かっているということを

言っておりました。そういうところでは、非常に前向きに取り組んでくれているのではないかと思っております。ただ、この資格については、夏休みに集中して開いている、別の講座によって取得できる資格となっております。これをみて、取りたい子どもが手を挙げてくるので、非常に真剣に取り組んでいて、合格率が高いと担当者が言っておりました。難易度が違うので、一概に比較はできないけれども、非常に取りにくいものですけれども、高い確率で取得していると担当が話しておりました。

菊池委員
関連していいですか。かなり専門性が高い資格を取得した生徒も、履修した生徒も大勢だということですが、その後、就職する生徒が多いのか、それとは別に進学でしょうか。

山岸委員
就職のために資格を取っているかについては、データはありませんけれど、感覚として、一概にそうではないのではないかと思います。簿記もそうです。すぐ高校卒業後、就職したいので簿記をとっているというよりも、簿記を学んだ機会に資格を取ってみようということで、そういった生徒は、結構進学希望者もいます。

菊池委員
いわゆる、簿記のような一般資格は、基本的な教養として取得すると思います。一方、工業系の資格というのは、専門的な技術を身に付ける意味で、活かす方向が限られることを理解したうえで取られているのではないかとの印象を受けましたが、何か先生方からアドバイス等もあったりしますか。それとも、一般資格と同じようなレベルで、資格を取得して、進路にはあまり影響しないということですか。

山岸委員
進路のために取ったかというのは、データがないのでわかりませんが、当然興味関心があるから取ったという、恐らく授業の影響というものが当然考えられると思います。

田中委員
単純なことですけれども、卒業生の半数ぐらいが、４年制の大学に進学していますが、学校の目標は総合学科で、進路を進学とするということとは違うと思いますが、そこで対外的に出る子ども達の勝負する気持ちとか、先生達の進学に対する心構えというところのギャップはありますか。

中山委員
一人一人の生徒が自分の将来を見据えた時に、４年制大学に進みたいと思った時には、出来るだけ進路の保障をしてあげたいという風に思っています。そういった中で、今までは、例えば先ほど言った就職の部分や公務員の部分や専門学校の部分と同じ並びの中で、４年

制大学への進学もケアしていました。ただ、今お話のあったとおり、人数的に見ると、かなり４年制大学への進学者が多いという中で、ここの部分については、もう少し力を入れていかないと、生徒達一人一人のニーズに答えていくことにならないのではないか。という反省の中で、今考えている学力向上プロジェクトがあります。これは大学進学だけを狙っているわけではないのですけれど、学力向上プロジェクトの１つの考えている側面としては、やはり今まで足りなかったと思われる４年制大学へ進学を希望している子ども達に対するケアをもう少ししていったほうがいいのではないか、ということの表れであり、今そういったことを取り組んでいるということがございます。

安彦委員長
今、田中委員がおっしゃたようなイメージというのは、みなさんお持ちなのですか。総合学科というのは、必ずしも進学に関係ないという、そういうイメージがあるのですか。
元々、普通科と商業科と工業科を統合している訳で、総合学科として、そのあたり何かご意見はありますか。

小林委員
自分は、ＰＴＡ会長をやらせていただいていて、１保護者として、お話ししますけれど、色々社会的なことを教えていただきたい気持ちもあるのですが、受験対策というのが、一番の問題であると思います。ですから、総合学科ということで、１つ聞きたかったのですが、８系列で、110 の選択科目を毎年見直して、履修人数が少ない所をやめて、人気のあるＩＴですとか、自分は中にいて内容を良くわかっていますが、櫻倶楽部とか、受験対策のそういうような講座を、一つの講座としてできないのかと思います。これだけみなさん４年制大学に行くというようなことが普通になってきますと、総合学科のそういうところも教えてほしいのですが、それとは別にまた、受験に特化したところも欲しいというのが１つの意見です。ですから、やはり、８系列の 110 科目の中で、見直しというのは、中々難しいのですか。

山岸委員
科目の見直しにつきましては、毎年毎年見直しをしております。教科の意向も踏まえながら、選択のニーズのあるなしを踏まえながら、見直しをしています。特に、受験に特化した科目を具体的にどうにかできないか、ということでよろしいですか。

小林委員
そうです。

山岸委員
授業で行っている科目につきましては、当然、教科、科目の目標がある訳ですから、受験力を付けるというのが、その目的ではございません。ただ、そういうような授業をとおし

て、受験科目に関心を持ち、その力が、授業を受けながら付いていくというのは、当然あろうかと思います。また、受験補習的なものは、授業とは別に、例えばサテライトとか、受験補講として行っていますので、それらは授業とは切り離して、特に受験に特化した進路を考えているところはあります。もちろん、更に深く学びたいというものは、世界史発展等という科目もあり、これについては、深く学ぶことによって、当然受験学力も付いていくというねらいもありますけれども、基本的には、教科、科目のねらいにそって授業は行われています。

安彦委員長

今の問題は、これからも何度か議論が出てくるかと思いますが、特に保護者の方に申し上げますけれども、根底は、高校は予備校ではありませんから、その点はよくお考えください。予備校は、本当に入試しか考えておりませんし、その先のことは一切考えておりません。子どもの育ちは何十年も続くわけで、この辺はよくよく教育的な観点からお考えいただかないといけないと思います。他になにかありますか。

吉田委員

資料６と資料７の部分は触れるだけとありましたが、学校の行ったことへのパーセントを見れば、とてもプラスのところが多くてよいのかなと思いますが、お聞きしたいのは、中で働いている先生方がもっとこう変えたいとか、こういう風に変えて欲しいとか、そういうものです。どこを見たらわかるのかなと思うのですが、具体的な 10 年の検証を見ても、見えてこない。中で働いている方々が、一番現場でやっている訳だから、もう少しそういうものが見えるのであれば、教えていただきたい。

中山委員

10 年の検証の部分について、例えば 10 年間をまとめて改善をしてきている訳ではありません。毎年毎年、「産業社会と人間」のところでお話しましたけれども、より良いやり方を求めて、毎年新しく改善してきたところがありますので、職員の方で気がついて変えていった方がいいのではないかというところについては、その場、その場の時点で修正を加えてきている、と考えてきております。もし、小野寺委員からあればお願いします。

小野寺委員

商業科、普通科、工業科という、３つの全然違う学校から職員が来ましたので、開校当時の意識としては、温度差があった部分がたくさんありました。総合学科はどういう学科なのだというところに、立ち戻って議論したこともあります。そういう中で現在、総合学科というのは、全ての生徒の進路希望に対して支援をしていこうという理解が、立ち上げの時からと比べると、できていると思います。進学に対しても、就職に対しても、専門学校にいく子も、公務員になりたい子も、誰でも、そう思った自分の希望に対しては、支援をしていきましょうという確認のもとに、進んでいます。しかし、商業や工業の先生方は、

就職の子どもの面倒を今までずっと見てきたわけですし、横須賀高校の先生は、進学のことをずっとやってきています。そういう中で、総合学科になった時、色々な生徒が、自分のクラス中にいて、指導するということでは、色々な横のつながりの中でやってきたということがあります。そういうことをもとに、今振り返った時に、一般受験の生徒に対しての支援が、少し不足していたのではないかという認識をもったのが、ちょうど２年くらい前です。それ以外の例えば、ＡＯ入試とか、推薦での面接指導などには万全を期してやっていたので、ほとんどの生徒は合格していました。でも、一般受験の生徒に対しては、やはり少し支援不足だったのではないかという反省を元に、これから話がでると思いますが、学力向上プロジェクトとか、今年立ち上げた櫻倶楽部というものを作っております。ですから、その都度、職員としては、今やっていることはどうなのだろうという振り返りを毎年、毎年やっている中で、ここまで来ているということで、決して、停滞をして、こういう風になったら良いのにと思いながら過ごしてきた 10 年ではないということです。

吉田委員

先生方は、今日こういう会が開かれて、中の方達もいらっしゃいますが、どちらかというと学校外の人たちが、今後、５年後、10 年後の話をされているというのは、わかっているわけではないですか。例えば、公郷中学校でも年度、年度で反省があり、学校評議員さんとか、関係者の方の話し合いはあるのですが、開校何十年ということで、外の方が、委員会を開いて、みんなで集まって検討していただくということは、無い訳です。そうすると、外の力で変わるというよりも、中の方々が、もっとこういうところに予算を付けて欲しいとか、まだこういうところが足りないから、こういうところを改革の部分としてもっと認めてもらいたいとか、そういうような声というのが、あるのではないかと思うのですが、あまり、それが見えていなくて、外から変えた方がいいということだけが、今後議論されていくとなると、そういう中の方の声の部分はもったいないというか、やってこられた方の思いがもっと出る部分があったほうがいいのではと思いましたので、話をしました。

安彦委員長

ある程度は、学校の中でやっておられるかと思いますが、この場まで届くようにしていただきたいということだと思います。内部の声は、私も大事だと思います。

中山委員

先ほど、事務局のほうから出た基本方針の中の報告書の短期的な部分については、多くの部分が高校の中で考えていく部分であると思います。この会は、この会で進んでいくのですが、この短期的な部分については、恐らく職員の中から出る考えを先行させていく必要があり、この会とは別に、高校の職員として、自分達の今の取り組みがよいのかについて、検討していく必要があるということで、日々進んでいこうと考えております。ただ、中長期的な部分になりますと、制度の問題も関わってくるので、これは高校の中から、声をだしてといっても、絶対に出てこない問題だと思っていますので、そういった部分について

は、ここでの議論を元にしながら、考えていくべきところは、考えていかなければいけないと思っています。

安彦委員長
できるだけ、内部の声は、何らかの形でいいですから、中山委員、山岸委員などを通して、この場にも、出すべきものは出していただけたらと思います。他にいかがでしょうか。

田中委員
部活が、かなり活発に取り組まれていると思うのですが、文化系と体育系で、指導されている外部コーチは、現在何人くらいおりますか。ほとんど、内部の先生たちが、部活の指導をされていますか。文化系等外部コーチはおりますか。いないようでしたら結構です。

小野寺委員
たくさん来ています。週に１回、月に４回という講師の方から、時間的に１回２時間で、156 回分というような形で指導をしてくださるコーチまでいます。

田中委員
それは、横須賀市から手当てが出ているのですか。

小野寺委員
はい、そうです。いわゆる通常のコーチと特別コーチという形で、２段階的に部活によって違います。

田中委員
それはかなりの部活でしょうか。ほとんどでしょうか。

小野寺委員
ほとんどの部活にはきていると思います。いわゆるコーチという名前の講師の方も含めてです。

中山委員
ただ、お金を市からコーチ代として費用が出ているのは、極わずかです。あとはほとんど、ボランティアという形であって、ＯＢとか、退職した職員であるとかが来て、その部の面倒をみているという実態があります。

田中委員
学校として委託をして、このクラブと、このクラブと、このクラブのコーチをやっていただくというのは少ないのですか。

中山委員
陸上競技、アーチェリー、吹奏楽、箏曲、茶道です。

安彦委員
今年度から、新教育課程になって、部活も、正規の教育課程に準ずる活動と認識されていますけれど、予算的には、今とそんなに変わっていないですか。

中山委員
コーチの部分については、変化はありません。

小野寺委員
付けていただけるのであれば、是非よろしくお願いいたします。この場で言って通るのであれば、よろしくお願いします。

吉田委員
そういうことが、先ほど言った「本当はこういうところにもっと予算を出してもらえれば、こういう改革ができるのだ」という中の部分の声を出したほうがいいということです。

小野寺委員
でも、去年のプロジェクトの基本方針の中に、スポーツ活動や文化活動の充実ということがあり、当然そういうところは、考えていただけるのかと思っておりました。

長井委員
先ほど、中山委員の 10 年間の検証を伺いまして、私が思っていたものとほぼ同じ検証結果になったという感じがしております。元々、横須賀市内の市立高校、商業高校、工業高校の３校を 10 年前に統合してできた学校で、３校が１校になったその３校の特色を十分に発揮されているのではないかと思います。生徒達の感想、アンケートを拝見しても、ほぼ生徒さんは満足しているし、保護者も満足されていると、そういう結果であると、私は受け取っています。ただ、色々うかがっていますと、３校の名前を全部受け止めてやっているのだということで、少し欲張りすぎのようなことがあるのではないかという気がしないでもないです。総括的な話になってしまいますけれども、最終的には、進路指導、学習指導を充実させなければいけないという課題が浮かんでいるのではないかと思います。学校案内の資料のご説明を受けましたが、４年制大学の進学実績、東大、東工大、有名私立大学と、10 年間でこれだけの学校の進学実績を出せるというのは、大変な努力ではないかと私は思います。この就職難の中でも、就職が 100％でこれも素晴らしいという風に思います。ただ、２年次から選択科目になるということで、100 科目以上は、多すぎるのではないかと思います。生徒さんのアンケートの中で、多すぎるような意見を述べていた生徒さんが、

いたように思うのですが、科目が多いと、先生の数もそろえないといけないというのもあるのではないかと思います。先ほど、学校の教室のご案内をしていただいた時に思ったのですが、開校当初は、100 人の先生がいたけれども、今は 70 人ということで、こういう状況で、科目数が多いというのは、果たしていいのかどうか、その辺が疑問に思いました。定時制が、若干問題を含んでいるというお話でしたけれども、その中であっても、努力をしている生徒さんがいるということで、そういう生徒さんに対しては、先生方も協力していきたいというお話がありました。しかし、定時制は、このまま残していくのかどうかという問題について、私はよくわからないのですけれども、中山委員としてはどういうお考えでしょうか。

中山委員
残す、残さないは、教育委員会の判断になると思いますけれども、先ほど説明した資料の最後の方ですが、定時制も今年度から入学者選抜制度がかわりまして、全日制と同じところで、競争の倍率がでるのか心配していました。けれども、定時制も倍率が出て、それは、それだけ本校に定時制で入学したいという子ども達が多く存在するということかと思います。そういう意味で、学校としては、こういった必要な生徒がいる以上は、続けていきたいと考えております。

安彦委員
時間もちょっと気になっておりますが、他にありますか。

北條委員
全日制と、定時制の話がありましたが、あと、市民への開放をされているものはあるのでしょうか。先ほど、色々資格の話もありまして、市民対象の講座はございますか。

中山委員
講座を市民に開講しているものは、今のところありません。施設の部分では、市の主催行事などについては、学校の施設が空いている限りで、ご協力しているというのはありますが、講座そのものはありません。

安彦委員長
それでは、次の第３の議題もありますので、そちらに移らせていただきます。議事の３の「横須賀総合高校の教育の充実を図る取り組みについて」、総合高校の中山委員からお話いただけますでしょうか。

中山委員
事務局から出ている「在り方の基本方針」の短期的な部分の取り組みについては、高校の方でも、並行して進めていかなくてはならない課題だと思っております。科目の見直し等

は毎年やっておりますけれども、大胆な系列の見直しについては、まだ、着手ができていないところがあります。そういった中で、今の段階で、具体的な形になって表れているものとして、短期的な取り組みの中に入っておりました学力向上という部分については、学校の方で進めているものがありますので、それについて、別紙１枚のプリントを出させていただきました。それにもとづいて、現状進めていることについて、ご説明させていただきます。今日付けの資料で、「学力向上プラン報告」という１枚をお配りしていますけれども、学力向上プランをなぜ校内で考えて立ち上げたかということについて、校内の動きというところに書いてありますが、学力の推移として、入学時の外部診断テストのＡ評価の判定を受けた生徒が、29 人いたものが、１年後に同じものをやったら、Ａ評価を受けたものが、８人に減ってしまったという相対的なものがありました。更には、家庭学習の時間を調査したところ 1 年次生で 17 分、２年次生で 19 分というびっくりするような数字が出てきます。更に、センターテストの動向をみても、英語が 80%以上取れたというものが、１期生で 13 名いたものが、５期生になって６名ということで、数が減少しているということ。そういったことから、安易な推薦入試とか、ＡＯであるとかに流れていってしまっているのでなないかという想像のもとの中に、これは、学力を生徒に付ける必要があるのではないかということで、学力向上プランの取り組みを始め、プロジェクトチームの立ち上げをしたというところがあります。具体的には、２番の学力向上プランの取り組みとして、全員の生徒を対象にしたものとして、家庭学習の時間が定着できていないという中で、下校時間を考えたり、あるいは、学習計画表を生徒に課したり、自宅学習の取り組みを意図的に行ったりということを進めていっています。更に、学習指導の充実、授業改善、教師側の問題ですが、こういったところに切り込んでいくために、授業アンケートを実施し、校内研修会を進めているところがございます。横須賀市の研究委託を今年度から受けまして、学力向上という部分を組織的に取り組もうとしています。学習環境の整備としては、休日に図書館を開けて、自習者を増加させていこうとか、あるいは、平日の図書館の利用時間を延長させて、学習の場を確保しようということを行っております。これらのことは、生徒全員を対象に進めているところであります。一方で、先ほどからお話のでている就職や各種学校への進学というところに対する力の入れ方と同じような割合で、進学に力をいれていたけれども、割合からいうと、４年制大学への進学希望者が非常に多い中では、もう少し４年制大学への受験者に対する支援をしていく必要があるのではないかということで、今年度から櫻倶楽部というものを立ち上げています。２年次生からが対象ですけれども、これは、本校総合学科の特色として、クラスという単位が無く、様々な進路を選んでいる生徒がいる中では、みんなで受験に向かって頑張っていこう、という組織的な取り組みがなかなか取りにくい。そうすると、一人一人が、個人で頑張るしかない。受験に向かっていくには、ある程度集団で、お互い切磋琢磨しながらやっていく環境を作っていくことが必要ではないかということで、大学進学希望者を１つのクラブとしてまとめあげて、そこで一緒に活動していこうというのが櫻倶楽部の発想でございます。具体的には、勉強の仕方であるとか、今後、冬季の学習合宿であるとか、今のところ計画して進めています。その他にも、進学講演会を実施したり、あるいは、保護者対象の進学説明会を開催したり、

サテライトの実施を行っています。サテライトについては、昨年度から実施していますけれども、予備校の DVD を借りてきて、放課後の時間希望する生徒が、通信でやっている予備校のように、あれを学校の方で、できる環境を作って、希望する生徒が、そこで放課後の時間を使って、学習していくことができるような、そういう環境を作りながら実施をしております。本年度で２年目ということになります。そういったところで、４年制大学への支援を強化していこうというところでございます。以上です。

安彦委員長
ありがとうございます。それでは、今の中山委員からのお話のなかで、何か、ご意見ご質問ありますか。

北條委員
今のお話の中で言うと、４年制大学への進学者は増えているけれども、学力は落ちているというのが現状ですか。

安彦委員長
落ちているというのは、１年後のデータだけです。

北條委員
ということは、そんなには落ちてはいないのですか。

中山委員
あくまでも、１年経ってＡ判定の割合が減少しているというだけです。多少自分の希望に向かって、難関があっても頑張っていこうというよりは、むしろあまり無理をしないで、行けるところに行こうという傾向があるというのは、そういったところにも影響があるのではないかということで、本当に自分の強い思いがあったら、無理でもチャレンジして頑張っていこうという生徒を育てていきたいということです。

安彦委員長
そういう裏の事情を考えないといけない、ということを言われているわけです。

北條委員
学校の目標はそういうところでやっている訳で、そういうことを期待されている訳ですよね。

安彦委員長
他にはいかがですか。

赤羽根委員

学力向上プランということで、まさしく今、横須賀市内の小中学校に向けて、具体化されていて、同じペースで高校も来ているのかという感じはするのですけれども、家庭学習の定着については、学校がいくら頑張ってもダメなので、これはどちらかというと、PTA会長さんから全校保護者に呼びかけていただいて、やらざるを得ないのかな、というのが１点思ったことです。この資料にも丁寧に書いていただいていますように、特色である単位制というところで、例えば、金沢総合とか、みなと総合というところも単位制の進学状況とか、あるいは県立高校の進学に関しての指導の仕方ですとか、そういったところの情報交換の場とかは、情報を得られ、そういう場があるのかなという質問が一つでございます。あと、進学率について、４年制大学 50%という話ですが、恐らく、高校なので指定校推薦などもあろうかと思うのですが、それが、ある意味でここの中にある、安易な方向という表現のところの一つだと思うのですけれども、そこに対しては、その５割に対してどれくらいのパーセンテージが指定校推薦で入られているのかを、お聞かせいただければと思います。

中山委員

家庭学習については、高校生にもなってそんなこともできないのかと思っていたことも確かにありましたが、ただ、現実を見たときには、というお話もありました。小中学生だと、保護者の方の協力、働きかけもあるかと思うのですが、逆に、高校生になると、なかなか保護者が言ってもというのはあろうかと思いますので、いかに動機付けをしていくかと、自発的な動きをどう整えていくのかというのが、我々の方では重要かと思っております。一緒に、PTAの会長さんとやっていかないと、とも思います。それから、近隣の県立高校と、情報交換ということについて、このようにやっているといった情報交換は、正直ないです。ただ、この学校で、このようなことをやっているのではないか、ということから、問い合わせをして、宿泊学習会は、ここととここでやっているということは、情報として入手はしておりますので、そういったところについては、個別に聞いて進めて、取り入れられるところは、取り入れていかないといけないと思っています。

山岸委員

まず、情報交換についてですけれども、県内の県立高校と私立高校、市立高校の総合学科の学校が、神奈川県高等学校総合学科教育研究会というものをもっています。県立高校が、中心になって今までやってきて頂いて、その仲間にいれて頂いているというのがあるのですが、そこに理事会や部会がありまして、そこの中で、会ごとのテーマを決めて、情報交換はしているかと思います。小野寺委員が、理事会に入っていると思いますが、いかがですか。

小野寺委員

自分で言うのもなんですが、県内の総合学科の中では、みなと総合、横須賀総合が、割と

トップの方の進学率であり、進学指導に関しての情報交換という意味では、参考になることが少ないです。話の中で出るのは、専門学校への見学とかで、本校にはあてはまりにくい内容もありますので、自分で、他の県立では、どういうことをやっているのかの情報を集めて問い合わせをするという形が多いかと思います。あと全く別のルートとして、神奈川県高等学校教科研究会で、理事として出ている教科が、本校ですと、美術、情報、音楽と、いくつかあります。事務局に入っておりますので、そういう時に、具体的にどういう進め方をしているのかを、例えば、本当に細かいことですが、調査書の点検はいつ、どういう風にやっているのかという事も含めて、情報をいただいてきて、それを、校内におろしていくという形を取ったりしています。県立高校向けの研修会に参加させていただく機会というのは、少ないかと思います。

山岸委員

先ほどの推薦のことですが、あの表では、４年制大学進学が 50%ですが、10 数%は進学準備になっておりますので、それは浪人生です。これを加えると、大学進学の割合は 60 数%になっているかと思います。その中で半分くらいが、指定校推薦となります。

小野寺委員

それについて、去年のプロジェクトの時からずっと思っていることですが、進学希望について安易な方に流れているという文章があり、訂正してもらいましたが、毎年どの生徒もそういうことではありません。私は、６期生、今の大学３年生の担任をしていましたが、その時に限って言えば、一般受験の生徒が多くて、逆に、指定校推薦が、余ってしまって、誰か指定校で受ける生徒はいませんかと、キャリアの先生から毎日のように言われるくらいでした。でも自分の行きたいところではないので、致し方ないということになりました。指定校推薦がたくさん余ってしまっているという年もあった訳で、なぜ、安易に流れているという話が、どこで出てきているのか、私としてはすごく納得がいかないところがあります。その時は、いわゆるＭＡＲＣＨクラスとか、たくさん合格しています。東大に行った生徒は５期生でしたが、指定校推薦など安易に流れているのではないということ、そういう生徒もいる場合があるということで、年次や担任の指導の中で、十分その部分については改善できるのではないかと思っています。これはあくまでも、学校内の問題であって、内々に、年次のキャリアの指導で、十分改善していかれるのではないかという風に考えております。

安彦委員長

年々、指定校推薦が増えている傾向はありますか。

小野寺委員

指定校推薦を大学の方からたくさんいただくのですが、そこに行く子の数は、限られていて、指定校推薦の数が余ってしまって、大学に申し訳ないというくらいです。ですので、

あまり安易に指定校推薦に流れているのだという認識をもたれるのはどうかと思います。

松本委員

今のところ、受け入れる大学の方にも、定員を確保したいということでの、推薦枠があると思いますので、総合高校だけの課題ではないような気がいたします。先ほど、お話がでました、櫻倶楽部について、私は、話の内容を聞いてある程度わかっているつもりではあるのですが、他の委員の方は櫻倶楽部については、初めてだと思うので、山岸委員の方から紹介していただけるとありがたいです。

山岸委員

先ほど、中山委員もお話していましたけれども、問題意識をもちながら、学力向上プランというものに２、３年前から学校の中で取り組んでいるのですが、全員の学力をどう上げていくか、先生方の授業力をどう上げていくかという問題と、一方で、それぞれの生徒達が持っている希望、夢について、それぞれの夢をどう後押ししていくか、という問題もあるかと思います。特に進路の問題で、就職については、人数も少ないですし、母体校の商業、工業さんのパイプもありますから、就職、公務員については、高いのですが、非常に人数が多い、４年制大学の進学希望者に対しては、もう少し支援ができるのではないかという議論が出てまいりました。先ほど中山委員からいわれましたけれども、単位制なので、クラスごとの授業がすごく少なく、大学のように先生が待っている部屋に生徒が移動していく訳ですから、どうしても、学習集団が毎時間ごとに大きく変わっていきます。それから、クラスについては、生活集団として、毎日会いますが、専門学校も含めれば、年内に半分以上の生徒達が、進路が決まっていっています。そのような中では、一般受験で残っていく生徒は段々少なくなっていってしまう。そうなってくると、個人戦にならざるを得ないのですが、先ほどの話のように、受験は、個人個人でやるものですが、集団みんなで頑張るところもあるかと思うのです。ですから、あえて集団の帰属意識を作っていく、そういう中でお互い切磋琢磨できないかと、そのような取り組みを始めました。櫻倶楽部と名づけた、いわゆる勉強クラブのようなイメージです。今までも、当然進学指導はしていたのですが、その進学指導を櫻倶楽部の名の下に、これからやっていけたらと思っています。更に、色々な工夫、仕掛けなどを入れながら、最終的には、学びの集団になっていってくれたらという願いを、個人的には思っています。そのような取り組みを、今年から始めたということです。

松本委員

すみません。ありがとうございました。

菊池委員

それには、全体の対象となる生徒のうち、何人の生徒が参加しているのですか。

山岸委員

今年、試行でやってみようと呼びかけたところ、85 名の生徒が、入部というのでしょうか、参加しています。一応、出入り自由ではないですが、今は、部活が大変だからと遠慮している生徒も、入りたいと思ったら、いつでも入れる。そのような形で、生徒達には呼びかけています。

菊池委員

先ほどの、推薦が安易とかの話とは別に、受験に対するモチベーションを高めて、自分の進む進路を、学校がサポートしようという、そういう取り組みだと思います。個の集合体で切磋琢磨しながら、競争というか、色々仲間を見ながら、自分の方針を話し合うなど、そういう場面を作ってあげるということですね。僕自身、櫻倶楽部というのは、非常に素晴らしい取り組みだと思っています。

安彦委員長

一言釘を刺すようですけれど、私の観点からすれば、これはあくまでも基本的にはボランティアだと思います。私が高校時代には、あくまで受験者でそういう必要がある場合は、希望者が集まって、それでその面倒をみようという先生が、ボランティアでやってくれました。今は学校の先生がやらなくてはならないもの、そういう雰囲気が進んでいます。ですから、改めて、色々なところで言っていますが、端的な話なので、是非聞いていただきたいことがあります。ご存知の方は多いと思いますが、何年か前に、高校で未履修問題がありまして、本来、行わなければいけない必修教科の授業があるのにそれを行わないで、受験教科を教えていたという学校が、私学のみならず、全国で出てきました。そのうちの何校かを、文部科学省でヒアリングしましたが、陪席してよいとのことで私も陪席しました。ある県のある学校が、教育委員会の課長と高校の校長さんが出てきて、冒頭なんと言われたかというと、「私達は、保護者の方々に、『先生方頑張って来い』と激励されて来ました」と、平気でおっしゃいました。「『何も、あなた達は、悪いことをしていない。私達保護者や生徒の希望を受けて、一生懸命やってくれた。あなた達は、堂々と行ってこい』と言われてきた」と、こうおっしゃった。一言でいえば、これはもう、全く保護者が、あるいは子どもが、求めているものを何でも引き受けて、やらなければいけないのが学校の先生だという見方です。当時このことは、ユーザー主義と言われ、これは消費者、ユーザーが求めていることに、先生は答えろというわけです。しかし、これを一通り聞いた後に、文部科学省の役人が「安彦先生、何かご意見ありますか」と言われたので、「それでは、あなた方は、保護者や、あるいは子どもが、泥棒の仕方を教えてくれと言ったら、教えますか」と私は尋ねました。なんでも、そういう事を言う人のことを聞かねばならないなら、やらなければならないわけです。でもそこはやはり、教師は教育の専門家ですから、さすがにできないはずです。そういう意味では、なんでも親のいう事を、ユーザーがいう事を聞かなくてはいけないという発想は、教育についてはあてはまりません。まずは、本来教えるべきことをやらずに、隠して別のことをやっていること自体が間違っている訳です。

そういうことについてまず、棚上げしておいて、平気で言い直るわけです。保護者の声を受けて、正直、まるで学校が予備校と同じ事をしなくてはいけないという。本来学校というのは「公教育」で、予備校の方は「私教育」です。あちらは教育産業であって、こちらは教育機関ですから、仮に儲けがなくても、やらなければいけないことは、やるわけです。高校生というこの発達の大事な時期に、どういう力を伸ばしてあげなくてはいけないか、将来を見通して、これだけのものを育てておこうという、青年前期の子どものために、後期中等教育をどうするかということを、学校は法律のもとでやってきているのです。ですから、その法律的なことがあるということは、法律から自由な予備校とは違うわけです。ある意味では、そこが全然区別が付かないでいる。保護者の言うことは、その通り学校がやらなくてはいけない、あるいは、予備校と同じことを学校がしないのはおかしいという、そういう風潮がある。一言でいうと学歴主義がこれだけ進行してきてしまって、産業界は、大学卒でないと採らないような雰囲気を作っていますから、保護者の気持ちからすると、とにかく子どもを大学に行かせなければならないという、その気持ちはわかります。しかし、そういうことが、逆に言うと、色々なところをあいまいにさせてしまっていて、教育ということの本筋を忘れさせてきていると思います。改めて、今回こういう高校の在り方について、中教審でも議論していますが、国全体の雰囲気がぼやぁっとしたままで議論していますので、色々な考えが飛び交っていまして、そういう意味では、皆さんもここでそういう事を、改めて突き詰めて考えていただきたいと思います。そもそも学校の先生がすることというのは、単なる、受験準備教育ではありません。もちろん基本は、私もとても大事なことと思いますが、子どもの希望にできるだけ応えたいということであり、それは学校の先生として当然だと思います。正直言って、学力の方についても、進学希望者だけをというのではなくて、就職の人でも、なんでも進路に応じて、自分の子どもが、こういう風に生きたい、大学に行きたい、こういう会社に行きたいということに、できるだけ応える努力をする。これは、学校の先生として当然のことと、みなさんお考えだと思います。でも、それを義務だとしてまで考える必要は無いわけで、そこは違うと思います。こういう点が、先ほど、ボランティアと申しあげたことなのです。時間を取って申し訳ございません。国もそういうことについて集中的に審議しておりますが、政権が変わったので、また様子が変わるかもしれません。いずれにしても、そういうことについては、しっかりと、この場でも色々議論が出て、何かあれば、私は逆に中央でも言いますから、皆さんの方からも、ご遠慮なく意見を出していただければと思います。

菊池委員

今の話で、私は、強制的にこの櫻倶楽部ができたとは思っていません。生徒達の視点に立って、学校側ができる範囲で進路をサポートする場だと思っています。総合高校というのは、性格上それがしにくい場面もある中で、僕はいいことだと思います。さっき言ったように学校として、進学率をあげるためにやるのだというお仕着せでは無く、さらに、ＡＯとか推薦を希望する生徒にも広く門戸を開く。先ほど産業界も大学卒でないと採らない、と言う話がありましたが、どちらかというと、入り口の段階で、いわゆる競争を切り抜け

て来た学生と、推薦入学の書類で早めに決まってしまってそのまま入って、４年間すごした学生とでは、社会に出る段階で、人間形成に差がつくケースがあるということで、産業界自体も、面接時に、そこに目を向けているところもあります。その点で今後企業の対応も少し変わってくるかもしれません。そういった意味で、この取り組みが、変な形に歪曲するのではなく、極めて自然に生徒達の意欲喚起になるのなら、私は、よいかなと思っております。

安彦委員長
その辺は、同感です。釘を刺しただけです。
それでは、時間も来ておりますので、ここで、私の方から提案があります。今後、この検討委員会で審議検討する上で、必要な資料、討議資料というのを作成するチームというか、そういうものを作っておかないと、私達が、ただ来て話をするわけでは済みませんので、検討のための討議資料を作成するワーキングチームを設置したいと思いますが、この点についてはいかがでしょうか。

各委員
了承の意

安彦委員長
基本的には、後でお知らせしますけれども、高校関係の方や教育委員会の方にお願いして、それぞれの議題ごとに必要な資料、関係する資料を出していただけるようにしたいと思います。委員につきましては、委員長と事務局にご一任いただけますでしょうか。

各委員
異議なし

安彦委員長
それでは、そのことについては後程ご報告します。次回は、目指す学校像について議論いたします。先ほど、中山委員から、本校のこれまでの 10 年というものを前提にして今後のことを少し出していただきましたけれども、学力向上プランの方で、いくつか出てきておりますので、こういうものを元にして、学校像につきまして、基本方針を詰めていきたいと思います。もし、今の段階で、こういう資料が欲しいというものがありますか。思いつきでもよいので、ありましたら、出していただけたらと思います。

福田委員
私が、この中に入れていただいております趣旨と申しますのは、神奈川県の公立高校の中の１つの高校として、横須賀総合高校がある。神奈川県の県立高校が平成 12 年から 10 ヵ年で、県立高校改革推進計画にそって、再編統合を進めてまいりました。昔学区というも

のがございまして、今は、全県１区ですが、そうはいいいましても、地域的な要因がございます。その中で、当時横須賀市教育委員会の動向を踏まえた結果として、この横三地区には、県立高校として総合学科高校を作らなかったという経緯が、実態だと漏れ聞いております。そういった大所高所を踏まえて、委員の方にもお考えいただいて、この市立横須賀総合高校の今後の在り方について、ご議論をいただくのが、私の出席している立場としてありがたく存じます。今日も、数字的な比較の資料、そういったご要望がありましたように、例えば、横須賀総合高校と、県立の総合学科高校で、お金の面であるとか、いろいろな面であるとか、比較をされるとか、そういった客観的なデータに基づいて話し合いを進められると、よりよろしいのかなと思いましたので、一言だけ申しあげさせていただければと思います。あと、１点だけ、山岸委員より総合学科の集まりについて、あと小野寺委員からもありましたけれども、神奈川県の総合学科高校として県立大師高校が平成８年に、最初に普通科から改編し、そこで育った人材が、次の県立高校改革推進計画で総合学科を立ち上げるために、散らばっていった経緯があります。そこで、先ほどご指摘にあった、神奈川県総合学科高等学校長協会を組織し、その下にあります神奈川県高等学校教育研究会、その組織が、そういった、大師高校で育った職員が中心となって作っていったばっかりに、どうしても、県立高校の総合学科高校の職員同士の感覚があるということは否めないと思います。ただ、私ども、県全体の観点から、私立も、市立の高校にも校長先生に入っていただいて、総合学科教育の振興に努めて行っているところでございますので、当然役員には、市立の先生も、私立の先生にも入っていただいて、一緒にやっているものでございますので、そういった誤解だけは、無い様にしていただきたいと思います。以上でございます。

吉田委員

確認なのですが、先ほど委員長のお話の中に、討議資料作成チームを作成し、次の色々な課題をということでした。第２回が目指す学校像ということですが、ＰＴの時には、外の人が決めたものを中の人で、これでやるのだぞという雰囲気があり、それは違うかなと思っていました。目指す学校像というのは、基本的に学校の中から、今までの変遷の中で、こういうものを更に５年後 10 年後というように出すものかなと思っています。それが、先ほど言いました、討議資料作成チームで、作成されるのか、それとも、10 年経た中で、次を見通して、校内で出来ているのならば、それがたたき台になるのか、そこの所はいかがでしょうか。

安彦委員長

先のことはわかりませんけれど、私の考えでは、本校と教育委員会、制度上のことが入ってくるので、両者の集まりになると思います。そういう意味では、両方入ってくる、それが、どれくらいの割合かわかりませんけれども、まず絶対ではないですが、本校の意向を無視しては作れないと思います。その点は、一部きちんと入れた上で、両方の資料として出していただくことになると思います。別々に出てくることは、無いことは無いかも知れ

ませんが、できるだけチームでまとめて出していただこうと、今は思っています。この点は、教育委員会の方でも、留意しておいていただきたいと思います。

吉田委員

冒頭に話しましたスケジュールの部分がまだ見えていないのですが、どういう進み具合で、27 年に向けていくのかがわかりません。落としどころではないですが、それが、答申案というところなのかもしれないですが、これだけの７回のスケジュール中で、はたしてそれが、中高一貫の部分まで行くのかどうかというところが、見えていません。中学校の代表として出ているので、開示して構わないということですので、下川委員も小学校の校長会で、今回こういう話があって、こういう見通しだと、見通しを言いづらい部分がありませんか。中学は中学でやっていきますが、その中で中学は今年の進路の部分にも出てきますし、今のところ、来年、再来年は今までどおりやるのであろうと思いますが、27 年に向けてのところはどうなるのかという気持ちがあります。中高一貫のスケジュールは、別に見える形があるとよいと思います。色々な論議というか、突然出てきて、決まってしまうようなところは、是非避けていただきたいし、本当にそれが必要なのか、必要ではないのか、今後どのような形で、必要だというのがでてくるのか、そこら辺の見通しがないと、代表で出てきて、戻ってもなにも話せないので、そういうところも、討議資料作成チームに宿題が多くて大変だと思いますがお願いします。

安彦委員長

あくまでも、資料作成チームの仕事は、討議資料の作成ですので、ここの進行具合を決める程の権限はありません。あくまでも、私達が求めたものに答えていただくだけなので。ですから、この第７回でどういう最終答申が出るかによって、27 年度に動くのか、28 年度にするのか、教育委員会が決めることだと思います。我々は、この第７回で決められることを決めていくことだと思います。少し、気長にお考えください。

下川委員

小学校の校長会を代表して出てきているのですが、年間３回だけの会議ですので、先々のことを考えて、私は生徒たちの学習に対する意欲であるとかの話題もでましたが、先生達のことも気になります。前は、３校あったものが１つに統合されましたから、その辺の人事交流のようなものが、滞っているように思います。次回の時に、在職されている先生方の、総合高校になってから、何年くらいで、どの程度人事交流が進んでいるのかを、参考に見たいと思いますので資料をお願いします。

安彦委員長

第３回の 12 月には、中間まとめを出すということですが、この中間まとめは、できあがったものしかできないと思っておりますので、経過報告です。

吉田委員

学力向上プランとありますが、中学校も、小学校も、今、学力向上、学力向上と、委員会から、言われているわけですけれども、学力の中には、当然のこと、正しく生きる力という大元のものがあります。その力がどのように上るかと、きれいごとかもしれませんが、学校教育としては、それがないといけないと思います。委員長が先ほど言われたところですが、何か学力向上を強く訴えると、具体的な数値目標を出すようにと考えられているような傾向があるのですが、それも必要なのだろうと思いますが、並行して、その学校、その学校のキャリア教育というか、どういう子ども達を望むのか、目指す学校像と同じように、たくましく生きる力向上プランではないですけれど、そういう話も、この中に組み込まないと、こればかり先走るとよくないと感じました。以上です。

安彦委員長

そういうデータも必要であれば出してもらうようにします。時間が、だいぶ予定を過ぎております。是非今のうちに出しておく意見がありましたら、出していただけますか。

赤羽根委員

昨年度からプロジェクトチームでだされている報告書の後ろに、プロジェクトチームの方々とその経緯があって、課題とか、中長期とかあります。この検討委員会は、教育委員会を出て、学校ぐるみで、我々市民の代表、保護者の代表含めて出てくるという、非常に大掛かりな会ではないですか。個人的に思うのは、学校として、どうしていいのかわからなくなっているというのが、本音なのでしょうか。こういう言い方をしたら申し訳ないですが、総合学科の学校として、３校が一緒になられて、かつ、ある意味すごく人気がある学校、私の知っている総合高校は、人気のある学校で、非常に受験の倍率も高かったと思います。その中で、よく私学が使う、学校の偏差値を上げたいから進学率をあげるとか、実績を作るという手法を、僕が高校、大学の時、散々みてきたのですけれども、そういうこともあるのかなというのがひとつあります。総合学科の総合高校のいいところの他に、ここではちょっと苦しくなってきたというのがあるのかなというのも、あります。正直なところがお話いただけるのかわからないですけれど、中山委員や山岸委員からお話をいただければと思います。かなり資料を拝見していますと、先生、現場の方とあって、年齢的なバランスであったり、それに伴った、配置に苦慮しているというので、これも恐らく、体力的な面ですとか、フレキシブルに動ける、動けないとか、いろいろなこともあろうかと思うのですけれども、当初の、立ち上げた総合高校の方針でいうところから、少しずつ苦しくなって、ぶれ始めたので、という感じが、会議の資料を見ていると思うのですけれど、お答えできる範囲で結構なのでお聞かせいただけたらと思います。

中山委員

先ほどと、ダブル部分もあるのですが、学校の方で総合学科のあり方を考えて、少しずつ良くしていこうということで、時点、時点で修正してきているということは、ありますし、

方向性として今、本校が、なにか大きく変換しなくてはいけないと、捉えているかというと、そういうことはございません。本校としては、枠組みを大きく変えようとすると、学校の方からは、提起できる問題ではないので、ここで１回みなさんのご意見をいただく中で、そういう枠組みの中まで考えていく必要があるということならば、それにそった形で進めていかなくてはいけないということで、これは決して、高校の方から要求して、皆さんに集まってもらって、高校の在り方を考えてくださいといったわけではありません。市の、市立高校１校しかないという中の市立高校の在り方という中で、市の教育委員会の方からの提起と、我々は捉えている状況です。

安彦委員長
それでは、時間も参っておりますので、協議につきましては、ここで終わらせていただきまして、事務局の方にお返しいたします。

栗野主査（事務局）
それでは、事務局から「連絡事項」についてご説明いたします。

中川（事務局）
それでは、４点説明させていただきます。時間も少しすぎてしまいまして、ご意見を出し切れなかったというところもあろうかと思います。ですので、本日ご発言できなかったご意見などにつきましては、７月 16 日(火)までに、メールにて事務局まで送付いただければと思います。
送付先は次第の連絡事項のところに記載してあります総務課教育政策担当のアドレスにお願いいたします。
追加でいただいたご意見につきましては、整理したうえで、各委員に情報提供させていただくとともに、本日いただいたご意見と同様に、資料に反映させていくよう検討いたします。
次に本日の会議録についてです。確認用の会議録が作成できましたら、送付させていただきます。内容をご確認いただき、修正がある場合には、送付文に記載させていただきます期日までに、事務局までご連絡ください。修正しました会議録を、市役所１階の市政情報コーナーで公開いたします。
三点目に、次回の開催予定です。第２回の本委員会は、現在のところ 10 月 30 日(水)を予定いたしております。近日中に、文書をもってご依頼させていただきます。
四点目ですが、本日「口座振込依頼書」をお持ちの方は近くの事務局員にお渡しください。
以上です。

栗野主査（事務局）
ただいま事務局から説明がありました内容について、ご質問がありましたら、挙手でお願いします。

吉田委員
確認ですが、次が 10 月の下旬ですが、９月２日に中学校の定例校長会がございます。委員で出させていただいておりますので、先ほど申し上げましたとおり、報告をするにあたり、どこの部分まで増し刷り等で、出していいものなのか教えてください。

河野（事務局）
本日ださせていただいている資料は結構でございます。それから、議事録につきましては、こちらの方で議事録を作成しまして、委員の皆さまに見ていただいて、修正の確認ができた段階で、９月２日には間に合うと思いますので、それでお出しいただければと思います。

松本委員
会議録はメールで送っていただけるとありがたいです。郵送ではなくてお願いします。

河野（事務局）
はい。

赤羽根委員
今の情報の開示について、私ども保護者ベースも同じと考えてよろしいですか。市Ｐ協で本日役員会がありまして、それはよろしいですか。

河野（事務局）
はい。

栗野主査（事務局）
委員長、委員の皆様、ご協議ありがとうございました。
最後に、教育政策担当課長がご挨拶申し上げます。

菱沼課長（事務局）
安彦委員長、並びに、委員の皆さま、本日はお忙しいところ第１回横須賀市立高等学校教育改革検討委員会にご出席いただきますとともに、活発なご検討をいただき、まことにありがとうございました。事務局といたしまして、本日の開催について、至らなかった点が、多々あるかと存じますが、ご容赦いただきますようお願いします。ご案内のとおり、本委員会は、答申いただく第７回までの開催を予定させていただいております。今後、委員の皆さまが、横須賀市立高等学校のあり方について、幅広い観点から、ご検討いただけますよう務めてまいりますので、ご指導のほどお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いします。これをもちまして、第１回横須賀市立高等学校教育改革検討委員会を終了させていただきます。ご出席の皆様、本日はありがとうございました。

以上